

# 釧路湿原と つきあう

新庄 久志  
(釧路市立博物館学芸員)



「ウヘエー、凍っていないぞ。」先頭を歩いていたメンバーの一人がうんざりした声を上げた。今年の湿原は雪が少ない。二月も中ばだというのに積雪は〇く数センチ、残雪とでも呼びたいほどの雪の固まりが、谷や沢地、くぼ地や日蔭にわずかに残っているだけで、車道にはまるでない。少し無理をすれば夏タイヤでも〇・Kといった状態だ。

とはいっても、冬を心待ちにしてきた歩くスキーマンバーは、もう待ちきれない。

「ヤチボウズやヨシの間には少しは残っているだろうさ。」

「川は凍っているよ。その上を滑れば植物も傷めないし、快適だよ。」と

冬の湿原行に踏み出した。

丘陵地のササ原をかきわけて湿原に降り、歩くスキー。そのもので雪のないハンノキ林に行く。ヤチボウズの間はずかな雪をつかんで河川の上流に出た。予想では凍結した川面に雪が残っていて、その上をさつそうとステータイングで風を切るはずだった。ところが、ガラスのような氷が岸辺をふちどっているだけで、川はチヨロチヨロ、ユラユラと流れている。いかにも冷たそうな流れは、あくまでも澄みきっていて川底まで見通せる。

「まいったなあ。」

「いや、ここはハンノキ林に囲まれているから温かいんだよ。もうすこし湿原の真ん中に出れば吹きさらしになるから凍っているさ。」慰めあつて自然堤防に残っている釣りの踏み跡にスキーを進めた。

釧路湿原は昨年の七月、国内で二十八番目の国立公園に指定された。日本で最後、湿原単独と大いに注目された。しかし、こうして湿原のまった中に立つてみると、二十年前に田中瑞穂先生や先輩に連れられて訪れた湿原と何にも変わっていないように見える。

湿原がまだ、谷地とか不毛の台地とか呼ばれて誰も見向きもしなかった昭和四十年代、釧路市立郷土博物館は、それまでコツコツと研究を積み重ねておられた北海道教育大学釧路分校教授

田中瑞穂先生や岡崎由夫先生のご教示を受けて、五ヶ年にわたる釧路湿原総合調査を実施した。結果は三四〇ページにおよぶ報告書にまとめられ、そのエキ스는釧路新書第十八巻として刊行された。それまで乳白色のペールに包まれていた湿原の神秘が少しづつあきらかになってきた。そこには自然科学から人文科学にわたるすべての分野を網羅した湿原博物館が展開していた。

湿原の全容が明らかになるにつれてこの豊かな自然を何とか保全できないだろうか。一方的に湿原を改変するのではなくて、できるだけ破壊しないので後世に伝えていく手立てはないものだろうか。そんな議論が彷彿としてわき出した。すでに一部は国の天然記念物として保全されていた。国際法、国内法による保全が検討された。当初は自然環境保全法が求められたが、これは残念ながら該当しなかった。最終的に残ったのが国際湿原条約と自然公園法であった。湿原保全の声が上がってから約二十年、長かったようでもあり、意外と短くもあつた。ご尽力された釧路湿原名付の親、田中瑞穂先生、札幌一朗道自然保護協会副会長、上田五郎釧路自然保護協会会長は彼方からどんな想いで見守っておられるだろうか。

「ここが国立公園だぜ！」川の堤に繁るヨシの中に腰を降ろし、ひたいの

汗を拭きながらメンバーの一人がいつた。

「ずいぶんとらしくない国立公園だよな。」

確かにらしくない。これまでの国立公園は風光明媚で、抜群の景観を誇るはなやかな景勝地だった。しかし、釧路湿原は春はダニが降りそそぎ、夏にはヤブカがウァン、ウァンと蚊柱をつくる。ももまで埋まる谷地が延々と広がって容易に人を寄せつけけない。景観といえどもいかにも茫洋としていてとらえどころがない。展望地に立った人々はきまつて「ウワー広いなあ。でも何にもないんだね。」とため息をつく。

広がるヨシ・スゲ原と点在するハンノキ林、蛇行する河川や湖沼が散在する風景は、これまでの山岳地や海岸の国立公園のように人々の視野に立ちただかつて展開する景観ではない。視野をさえぎらないパノラマが展開する。

そこにはヨシやスゲ類が時おり風にそよぐだけで動くものは何もない。ごく稀に米粒のようなタンチョウが見えかくれするだけだ。イソツツジやヒメシヤクナゲがつくるお花畑はもちろん望めないし、氷河時代の遺存種キタサンシヨウウオや最大の淡水魚イトウも影すらない。川の流れも、木の葉でも浮いていなければ流れているのかわらないのか分からない。

季節の変化も、春はまだかと思つて

いるうちにいつのまにか緑つぼくなっているし、少し風が冷たくなつたなど感じる頃には、もうヨシやスゲ類がセピア色に染まつている。時の流れにまどめりはりが無い。もちろん、一歩踏み込んでみれば脈々とした大自然の営みが息づいているのだけれど、景観はひたすらひよひよと、淡々と展開している。

「おい、こんなところにヤチダモがあるぞ。」

「河底が浅いな。五十センチもないよ。山砂でいっぱいだよ。」

「見た目よりも湿原は変化しているんだな。」

調査が進むにつれて一見悠然としていた湿原が、実は最もこわれやすい、環境の変化に敏感な自然であることが明らかになってきた。湿原の命は水と言われる。無数の大小の河川や伏流水は、血液のごとく湿原を潤している。

植物遺体が分解し切らない泥炭は、タップリ水を含んでいて天然の貯水池になる。湿原に住む生物は、すべてがこの水に支配されている。だからもし、この流れに変化が起ると湿原はいとも簡単に姿を変える。川がショートカットされると、急流となつて湿原にあふれ出し、土砂を運ぶ。野山の植物が入りこみ、思いがけないところに樹林が登場する。水源が断たれた湖沼は異臭を放つてよどみ始める。ももまでつ

かる水位に潤されていた湿原が、スニーカーでも踏み込めるほどに乾いてしまふ。

湿原の変貌にはそれほど時間はいらぬ。数千年のスケールで築かれた湿原が、ほんの数十年で姿を変える。このような急激な変化に、悠々と生活していた湿原の生物たちは、とてついでいけまい。非湿原化は、著しい水源池の水位の低下や微気象の変動など、予想もしない環境変化を引き起こす。総合調査の結果は、そんなことも示唆してくれた。

「アオサギのコロニーはどこにあるんだらう。」枯れヨシをかき分けて歩いてきたメンバーの一人が振り向いて言った。

「ここから三キロほど入ったハンノキ林だよ。」

「いつてみたいなあ。今はアオサギはいないんですよ。」

「でも、あそこはアオサギの聖域だからネ。湿原で唯一の繁殖地だからいくら入りたくても彼らのホームタウンに踏み込むのはよしたほうがいいよ。」双眼鏡を湿原の奥にあるハンノキ林に向けてと、樹上に残っている幾つもの空き巣を確認できた。

「そうだね。やつと国立公園になったんだし、少しは我慢しないとネ。」うなずきあいながら、ふたたびスキーを滑らせた。



特別保護地区・キラコタン崎

これから湿原とどんな風につきあっていくのか。湿原をどのように保全していくのか。その手立てはまだ明らかではない。しかし、これまでの国立公園がそうであったように、指定されたとばかりに経済的なメリットを最大限に活用しようと、ズカズカ湿原に踏み込んで人間本位の利用計画を先行させてはならない。この命題は釧路湿原国立公園指定にたずさわったすべての人々の共通の願いでもある。

そこで、湿原の一部をそっくりそのまま保全する「リザーブ・エリア」の設定という提案が生まれてくる。湿原を保全するには、かなりの広い地積を必要とする。本来は、エリアに直接かわる水系すべてを網羅するのが望ましい。釧路湿原国立公園にはそんな提案にピッタリの地域がある。特別保護地区に指定されたエリアである。中心域はすでに国の天然記念物に指定され保全されている。これまでの特別保護地区だと、そこからは何物も採集しない。採取しないというステップにとどまる。しかし、そこから一歩進めてすでに失われた湿原とその周辺の本来の自然の復元を試みるというのはいかがであらうか。リザーブ・エリアを保全するのに必要であれば、その施策が特別地域や普通地域に及んだとしても果敢に押し進めていく。そんな取り組みが求められるのである。あるがままの

自然の保全だけではなく、失われた部分の復元をも実施する。湿原の水源地に当たる丘陵地や流域の植生、環境を復元し、水位、水質をコントロールする調整ダムなどを設置する。ハンノキ林やホザキシモツケのブッシュ林、スゲ類叢生群などによる天然のバッファゾーンをも構築する。そんな、より積極的な施策が求められているのである。

湿原にはまだ知られていない有形、無形の機能があるにちがいない。私達が自然と賢くつきあつていくために必要な様々な情報が凝縮している。湿原を唯一の生息地としている生物たちにとつては残されたサンクチュアリであるし、さらに湿原という独特の景観を維持するためにもリザーブ・エリアを欠くことは出来ない。

「人間の顔だつて、ほつぺたなんかはたたいたり、こすつたりするけれど目んたまは、たとえその瞳がいくら美しいからといって指を突っ込んだりしないネ。じつと見つめるだけで、むしろ目薬をさしてやつたり、サンガラスをかけて保護したりする。どうしても必要であれば医者に任せるよ。傷つきやすい湿原は、自然の中の瞳なのかも知れないな。」

「興味津々だけれども、そこが我慢のしどころということか。」踏み出したスキーの下でポキッと折れたクロミ

ノウグイスカグラにおもわず首をすくめたメンバーの一人があいずちを打つた。

「湿原はやつぱり川や湖沼を利用するに限るネ。自然をいためないし、それにスキーも快適だよ。」やつと結水した川面にたどりつき、感触を楽しむようにスケータイングをはじめたメンバーが振り向いて言った。

「夏になればカヌーで来れるし、あれだと水鳥もそれほど驚かない。きつと魚たちもO・Kだと思うよ。」

「スノーモビルや船外機つきのボートなどはまずいな。」

「湿原とつきあうには、動力は使わないで、あくまでも人力といきたいもんだ。湿原のリズムやスタイルにあわせて。」と雪面に残るキタキツネやユキウサギの足跡に見入る。

湿原は悠然としている。ゆつたりとしている。このリズムが今の私達には必要なかも知れない。湿原と違和感なくつきあつていく。丘陵地を散策するエゾシカのスタイル、川や湖沼にカヌーなどを浮かべて水鳥のスタイル、そして、木道などを利用するのはキタキツネやユキウサギのスタイルである。それも、決して大挙して、大群をなして乗りこんだりはしない。立ち入る人数は、湿原に受け入れてもらえる許容内にとどめる。必要があれば人数も制

限する。希望が多ければ湿原散策は順番待ちになる。自分の番がくるまで、指折り数えて楽しみにしよう。その間に予備知識をたっぷりためこんでおこう。あれやこれや散策プランを練つておこう。身体も鍛えておこう。フィールド・テクニクもみがいておこう。そうすれば、やつとめぐつてきた貴重な湿原とのふれあいの機会を、それこそ全身、全霊をかたむけて、楽しみ、味わうことが出来る。それは、かすめるように展望したときよりも、時間にせかされて無造作に踏み込んでしまったときよりも、きつと豊かな思い出をつくつてくれるにちがいない。そして予期しない体験と思いがけない発見に身も心も生き生きとリフレッシュするにちがいない。釧路湿原にはダニもいるし、ヤブカも多い。茫洋としていて実にとらえどころがない。だからこそ充分な準備が必要だし、湿原という自然の予備知識が大切になる。

湿原とつきあう。賢くつきあう。そのためには湿原を理解することは肝心だ。まさか、惚れた彼女を人目にさらして金儲けをたくらんだりはずまい。惚れていればこそ、あれこれ気づかい手もさしのべる。湿原を理解する。彼女の立場になつて思いやつてみる。そうすれば何が末長くつきあつていける手立てなのか、きつとみつかるにちがいない。

夕日が丘陵地の樹林にかくれようとする頃、やつと湿原をぬけた。また、ササ原をかきわけて斜面を登る。ふりかえると、川面にシユプールがくつきりと二筋のびている。シユプールは蛇行をくりかえす川の上をヨシ原にかくれ、ハンノキ林を縫つて湿原の彼方に消えていた。

(釧路市在住)